

相撲界を揺るがせている元幕内若ノ鵬(三)ら力士の大麻問題。そのほとぼりも冷めないうちに、今度は俳優の加勢大周容疑者(三)が大麻と覚せい剤所持の現行犯で逮捕された。違法薬物は私たちの社会に、じわりと浸透している。今、必要な対策とは―。(岩岡千景)

# 広がる大麻使用

今月四日、逮捕された加勢容疑者の都内の自宅マンションからは、覚せい剤や乾燥大麻のほか、室内で栽培中の大麻草などが押収された。

「時代が変わってきたな」。かつて大麻や覚せい剤に限り、今は薬物依存症の回復支援施設「日本タルク・トゥデイハウス」(千葉県袖ヶ浦市)の施設長を務める十枝晃太郎さん(三三)は加勢容疑者の逮捕報道に、そう感じたという。

「以前は大麻を自分で栽培して使う人は少なかった。だげと最近が多い」と十枝さん。大麻の栽培は大麻取締法で禁じられているが、種の売買行為自体は規制の対象外。このため「ネット上では種の売買情報が飛び交い、携帯電話で連絡しやすくなる。栽培の方法を紹介した雑誌もあ

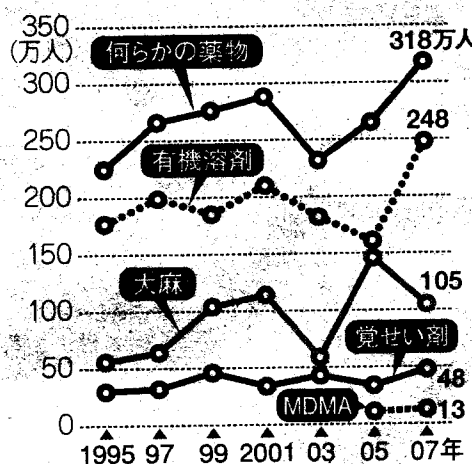
# 加勢容疑者の復帰対策急げ

## 人手容易自ら栽培も

「と言っ

大麻や違法薬物の広がり、芸能界などに限らない。全国の住民調査に基づくと〇〇七年の推計では、大麻を含む何らかの違法薬物を「使ったこ

薬物を使ったことのある人(推計)  
※「薬物使用に関する全国住民調査」より



## 住民調査 薬物経験40人に1人

清部長はわが国の薬物使用は「大麻が多い欧米型」になっていると説明する。自分が必要とされているか、思いなどを抱えた人が「違法薬物を一度でも使った」と話す。

また、日本タルク(本)「また、日本タルク(本)部・東京)の近藤恒夫代表は「薬物依存になるのは、学校でいじめられたる。また、日本タルク(本)部・東京)の近藤恒夫代表は「薬物依存になるのは、学校でいじめられたる。また、日本タルク(本)部・東京)の近藤恒夫代表は「薬物依存になるのは、学校でいじめられたる。」



## 施設の設置必要

わが国で、薬物依存症者が回復の場を提供してきたのは「タルク」だ。だが、現状では「依存症者が社会復帰できないのが最大の問題だ」と、提言するのは、廣谷大の石塚伸一教授。米国では治療施設の設置が、刑務所での拘禁ではなく、治療の義務を科す裁判制度、ドラッグ・コートがある。これに対し日本では、薬物犯罪者は通常、覚せい

# HOU 特報 TOKU

し、ネット上の買行為自体は規制の対象外。このため「ネット上では種の売買情報が飛び交い、携帯電話で連絡しやすく買える。栽培の方法を紹介した雑誌もあ

## 依存症者の



「日本タルク・トゥデイハウス」で共同生活し、社会復帰を目指す若者たち。千葉県袖ケ浦市で

## 民間団体「治療施設の

ングに参加。依存症の背後にあるストレスを改善させ、人との距離感を取り戻すことで回復を目指す。

欧米では地域の中に、社会参加を目指す義務を科す裁判制度、ドラッグ・コートがある。これに対し日本では、薬物犯罪者は通常、覚せい剤の所持と自己使用の場合、初犯は執行猶予に、再犯だと実刑になって服役する。だが「依存症だと再犯するのが通例で、

「薬物から離れて暮らしただけでなく、社会生活に必要な責任感や仕事のこと、手を出した人」に必要の責任感や仕事としての社会から切り捨てられている」と話す。施設を出て働けるようになる」と和田氏。入所は受け皿となつて、わ

「日本タルク・トゥデイハウス」で共同生活し、社会復帰を目指す若者たち。千葉県袖ケ浦市で